

多様性のなかから

寺村 摩耶子

二〇一〇年秋より一一年二月にかけて東京・上野の国際子ども図書館で開催された「絵本の黄金時代 一九二〇～一九三〇年代展」はさまざまな意味で重要かつすばらしい展覧会だった。世界各地で優れた絵本が数多く出版された「黄金時代」を、多民族国家アメリカとソビエト連邦というふたつの大陸を舞台に、世界の多様性が出会い、共存することの花ひらいた稀有な時代としてみつめること。そこには近代における〈子ども〉と〈大人〉の、そして〈絵本〉と〈芸術〉の出会いがあり、また未来の子どもたちに良い本を届けたいと願う人々の強い思いがあった。「絵本の黄金時代」とは、言いかえれば、あらゆる多様性のなかから生まれてきた「新しい花」だったのである。

それからおよそ百年。二十一世紀の私たちは過去の遺産を受けつぎながら、ひとつの分岐点にさしかかっているようにみえる。「本は単なる商品か、それ以上のものか」（一九一三年米図書館組合大会）という問いは、けっして過去のものではないだろう。すくなくとも日本において、豊かに成熟した絵本文化はこの先どこへ行くこうとしているのだろうか。

「もうずっと、ただの廃屋だったわたしを、／やっと思つてくれたのは、子どもたちだった」。丘の上の古い家が自分史を語る『百年の家』（ロベルト・インノチェンティ絵 J・パトリック・ルイス作 長田弘訳 講談社）。うしなわれた季節をいつくしむように、精緻な筆ですみずみまで描かれた大判の絵本からは、風化し、形を変えながらも、脈々とうけつがれていく石造りの家そのものの精神が伝わってくる。「絵が語る本」としての絵本の醍醐味を思いださせてくれた作品でもあった。ふしぎなだまし絵がイマジネーションをかきたてる『どこでもない場所』（セラ・L・トムソン文 ロブ・ゴンサルヴェス絵 金原瑞人訳 ほるぷ出版）。世界が「ひとつ」であることを美しいマチエールで描く『ひとつ』（マーク・ハーシュマン作 バーバラ・ガリソン絵 谷川俊太郎訳 福音館書店）。ジョン・バーニンガムとヘレン・オクセンバリーという世界的絵本作家夫妻による初の共作が話題を呼んだ『あかちゃんがやってくる』（イースト・プレ